

丹波〈たんば〉のててうち栗〈くり〉（山南町）

丹波といえば栗、栗といえば、丹波を思うほどで、昔から丹波は栗の名産地であります。

丹波の氷上郡山南町岩屋に、「ててうち栗」という珍しい栗があります。

栗の底に爪〈つめ〉でおさえたくぼみがついていて、足利義詮〈あしかがよしあきら〉がつけた爪あとといいつたえられています。

吉野朝廷時代の後村上天皇正平六年（一三五一年）京都にはいった足利尊氏〈あしかがたかうじ〉は戦に敗れて、子義詮と共に西国へおちのびる途中〈とちゅう〉、二千余騎〈よき〉をしたがえ丹波の井原のおく岩屋石龕寺〈いわやせきがんじ〉に身をよせました。

ここは、岩高く峰がそびえて四方がけわしくしぜんの城であります。軍勢〈ぐんぜい〉の兵糧〈ひょうろう〉、馬のぬか、わらにいたるまで山のごとく積みあげました。寺には勝軍〈かちいくさ〉の神である毘沙門天〈びしゃもんてん〉がまつてあるので、足利勢〈あしかがぜい〉に勝ち運〈うん〉がめぐってくるように、祈〈き〉とうしてもらおうたのみました。寺では、勝軍毘沙門〈しょうぐんびしゃもん〉の法〈ほう〉をおこない七日にあたる日、祈〈き〉とうが終り、お供物〈そなえもの〉の栗を義詮〈よしあきら〉に献上〈けんじょう〉しました。

義詮はこの栗を、家来〈けらい〉に分けあたえながら、次のようなことをちかっただといわれています。

そのちかひとして、栗の底に自分の爪跡〈つめあと〉をつけ、「この栗が芽をふくことがあれば、自分は必ず都へ出ているであろう。」また、「この栗が実をつける時には、必ず天下に号令してみせる。」と、次の和歌をそえて、和尚〈おしょう〉さんにわたしました。

都をば出て落栗〈おちぐり〉の芽〈め〉もあらば、世〈よ〉にかち栗とならぬものかわ。

和尚さんは、爪跡のついた栗を、植えて水をやるなどよく手入れをしたところ、やがて、芽〈め〉をふき

「桃栗〈ももくり〉三年、柿八年」の、ことわざのように年月がたつて、ついに実を結〈むす〉ぶようになりました。

その実には、義詮ののこした爪跡がはっきりと、くぼみとなってついていた。

ふしぎや義詮は、再〈ふたた〉び京にのぼり、ついにちかっただとおり天下をとりました。

爪跡の栗とか、歌の文句の「出て落栗ち」から「てておち」「ててうち」となったといわれています。

この物語りは、太平記〈たいへいき〉という本の二十九巻にくわしく書かれ、寺では、この物語りを版木〈はんぎ〉にほって「天々宇知久里之実説並搗栗〈ててうちくりのじっせつならびにかちぐり〉ヲ祝物用古又〈いわいものにもちふること〉」として昔から残してあります。

栗のしぶ皮〈かわ〉をむいたものをカチ栗といって、お正月のお祝に用いています。

